

# 道の上で見た話

小川未明

青空文庫



いつものようにぼくは坂下の露店で番をしていました。

このごろ、絵をかいてみたいという気がおこったので、こうしている間も、物と物との関係や、光線と色彩などを、注意するようになりました。また坂の上方の空が、地上へ

ひくくたれさがつて、ここからは、その先にある町や、木立などいつさいの風景をかくして、たとえば、あの先は海だといえ、そうも思えるように、いくらも空想の余地あるおもしろみが、だんだんわかつてきました。

その日は、からつとよく晴れていました。ただおりおり風が、砂ほこりをあげて、おそいかかるので、気持ちがおちつかなかつ

たけれど、毎年、夏のはじめには、よくある現象げんしやうでした。

ちようど、若い女わかおんなが、店の前みせまえへ立たつて、石せつけんを見みていました

が、ここをはなれて、あちらへいきかけたときです。とつぜん、

坂さかの上うへから、おそろしい突とつ風ふうが、やつつてきて、あつというまに、

女おんなのささしている日ひがさをさららつて、青あおぞら空たかへ高たかく、風かざぐるま車まのよ

うに、まきあげました。それは、またはなやかなアドバルーンアドバルーンの

ようにも、糸いとが切きれた風船ふうせん玉だまのようにも、うすべに色いろをして、

美うつくしかったのです。そして、日ひがさは、くるりくるりとまわりな

がら、あてもなく飛とんでいくのでした。

このとき、通とおりかかかつた人ひと々びとは、たちどまつて、上うへをむむき、

あれよ、あれよといいつてささわぎました。けれど、なかには、自じ分ぶん

になんのかんけい関係もないでござとといわぬばかり、ふたたび見あげ  
 ようともせず、さつさといくものもありました。こんなさいちゆ  
 うに、たぶんこのあたりをうろつく、浮浪児ふろうじでしょう。

「おれが、ひろうぞ！」と、叫さけんで、二、三人往來にんおうらいの人をかき  
 わけ、かけていきました。

風かせに、日ひがさをさらわれた、女おんなひとの人は、顔かおを赤あかくして、とりか  
 えしのつかぬことをしたと思おもつたのでしよう。いそいで、その方ほ  
 向うこうへいきかけましたが、五、六歩ほもいくと、きゆうに思おもいとま  
 つて、もどりかけました。そして、店みせの前まえまできたので、

「そんなに、遠とおく飛とんでは、いきませんよ。」といって、ぼくは  
 女おんなひとの人を力ちからづけようと思いました。

「いえ、だれかすぐにひろってしまいますでしょう。」と、彼かのじ女よは答こたえて、もはや、あきらめたように、いつてしまいました。こう聞きいたとき、ぼくは、なんとということなく、悲かなしかったのでした。

なんで、女おんなは、あきらめなければならぬかと思おもったからです。自分じぶんのものでありながら、それを保ほ証しょうする道徳どうとくのなかつたこと、こんな、よいわるいの分ぶん別べつがなくなるまで、社しゃ会かいがくずれたかという、なげきにほかありません。

健けん全ぜんな秩ちつ序じよのなくなるということは、まっ暗くらな晩ばんを、あかりをつけずに、道みちを歩あるくようなものです。ぼくには、ちようど、そんなようなわびしきを感じかんじたのでした。

二、三日にちまえ前のこと、ぼくは、おなじとお通りで、古本店ふるほんみせを出だしている、おばさんから、童話どうわの本ほんを借かりてきて、番ばんをしながら読よみました。そして、それに書かいてある話はなしに、ふかい感かん激げきをもちました。

それは、こはなしういはなしう話はなしです。

おおかみが、群むれをなして、すんでいました。どこへいくにも、先せん頭とうにたつのは、一なびきの年としとつたおおかみでした。なぜなら、このおおかみは、もう長ながい間あいだ、山やまに生いきて、いろいろの経けい験けんをして、このあたりの山さん中ちゆうなら、どんみちな道みちも知しっていれば、どこへいけば、なにがあるといちしきうことちしきから、またいろいろのばあいにたいして、だれよりも知ちしき識しきがふかかつたからです。

たとえば、病びようき氣のときには、どの草くさを食たべればいいのか、敵てきに追おわれたときは、どの谷たにへおりて、どの岩いわの間あいだにかくれるとか、そのことは、とうてい、若わかいおおかみたちの知しるところではありませんでした。

それだけでなく、かれは、敵てきと出であつて、たたかわなければならぬときも、自分じぶんは相手あいてのいちばん強つよいやつをひきうけるといふふうでしたから、みんなから、尊そんけい敬けいされていました。

しかし、この年としとつたりこうなおおかみも、鉄砲てつぽうのたまをふせぐことはできなかつたのです。ある日ひ、りようしにうたれて、きずついたからだで、みんなといっしょに、山やまおくの安あんぜん全ぜんなところまでにげのびてきました。そして、ついに、力ちからつきてたおれ

ました。

「今夜、わしは死ぬだろう。」と、年とつたおおかみは、いいま  
した。

おおかみたちは、道案内者を失つたあとの不安と心細  
さから声をあげて泣きました。

「わしが、いなくなつたら、新しい先達をえらぶがいい。ただ、  
いかなるばあいでもみんなは、ちりぢりになつてはいけない。た  
がいちからに力をあわせて、助けあい、いままでのように、生活をつ  
づけるのだ。」と、老いたおおかみは、いましめました。

夕ゆうやけは、さびしい、高たかい山やまの間あいだにうすれて、おおかみたちの  
悲かなしくほえる声こゑが谷たに々だににこだましたのでした。

「そうだ。ぼくたちも、ちりぢり、ぼらばらになってはいけない。正しい心と心がむすびついて、おたがいに生きぬく努力をしなければ！」と、ぼくは思ったのでした。

午後になると、ねえさんがきて、かわってくれたので、ぼくはしばらく、自由のからだになりました。

駅へむかう道の上で、なにかあるらしく人々が集まっているので、自分もいつてみる気になりました。それは、はじめに見る、悲惨の光景ではなかった。何年前にも、どこかで見たことがあるような記憶がしました。やせこけた、あばら骨の出た馬が、全身に水をあびたようにあせにぬれて、重い車をひきかねているのでした。

それをむりに引かせようとする馬子も、かみはみだれ、顔から、  
 胸へかけて、やはりあせがながれ、日にやけたひふは、赤銅  
 色をしていました。そして、身につけている、みじかい着物は、  
 やぶれていました。

ぼくは、馬の身にもなれば、男のたちばにもなつて考えたので  
 す。なんという、矛盾した、いたましい事実でしょうか。男に、  
 馬の苦しみをわからぬはずがない。ただ、この道をトラックや、  
 自転車や自動車が、たえず、往来するだけ、男を、いつそ  
 ういらだたせたのでした。

馬子は、はらだちまぎれに、あらあらしく、たづなを引くと、  
 馬は、頭を上下にふつて、反抗の意をしめし、前足に力を

いれて、大地へしがみつこうとしました。そのたび、ほこりでよ  
 ごれたたてがみが、雲のように波うちました。集まった人々は  
 遠まきして、見物しました。自分に関係のないことは、たい  
 ていの人は、冷淡なものです。

このとき、どこか、町の喫茶店から、レコードでならず、あ  
 まつたるい歌声が流れてきました。そこには、ことなつた生  
 活のあることを思わせました。

ひるまえ吹いていた風がやんで、空は、一片の雲もなく、青  
 々として、火のように、かがやく太陽のやけつくあつきだけ  
 でした。しかしどこかのいすに腰かけて、アイスクリームを食べ、  
 つめたいソーダ水を飲む人もあつたでしょう。ぼくは、この馬も、

この男も、なぜに休む自由がもてないのかとふしぎに感じました。  
 すると、見物人をかきわけて、まきゲートルをした若者が  
 前へ出てきました。

「この馬は、一度戦地へいって、帰された馬らしいが、かわいそ  
 うに、やせているな。つなをといて、すこし休ませてやんなよ。」  
 そういつて、馬に近づきました。馬子は、同情者があらわ  
 れると、交通の妨害となつて、しかられるのをおそれたけ  
 れど、いくぶんか大胆になりました。

「いつから、この仕事をやっているんだね。」と、若者が、聞  
 きました。

「こんなことをするのは、このごろなんです。」と、馬子は答え

て、つぎのように、身みのうえを語りかたました。

「私わたしは、もと百姓しやうでした。馬うまを持つて、働はたらいていました。それが、

戦争せんそう中に馬うまを徴ちやう発はつされたのです。なんで、わすれよう、

つれていく日ひ、馬うまは、ふみきりのところで、電車でんしやにおどろいて、

あばれました。私わたしは、こんなことで、びっくりするんでは、戦地せんち

へいつて、大砲たいほうの音おとを聞きいたら、どうするだろうと思おもいました

が、かわいそうにその後ご、どうなったか知しりません。

それから、自分じぶんも、村むらにいたくなくて、町まちの工場こうじやうで働はたらいた

のですが、戦争せんそうがおわったけど、村むらへ帰かえる気きがしなくて、こん

なことをするようになったのです。この馬うまも、飼かい主ぬしがろくろく

えさをやらないので、こんなにやせているのです。もつとも、人に

間まさえ食くえないのだから、口くちのきけない動物どうぶつは、みじめなも  
 んです。」と、馬ま子は、目めにはいりかけるあせをふきながらいい  
 ました。

「おれは、復ふく員いんして、間まがないが、まだ、やさしい顔かおにであわ  
 ない。戦せん争そうのため、みんな、人にん間げんらしさをなくしてしまつた  
 んだな。いつまでも、こんなんだつたら、この国くにはほろびてしまふ  
 だろう。さあ、早はやく水みずをくんできて、馬うまに飲のませてやんなよ。」  
 と、若わか者ものは、馬ま子をうながして、自じ分ぶんは、よごれた馬うまのたてが  
 みをなでました。

「そんなら、あとを、おたのみします。」と、馬ま子は、バケツを  
 持もつて、あちらへ走はしつていきました。

始<sup>し</sup>終<sup>じゆう</sup>を<sup>み</sup>見<sup>み</sup>て<sup>いた</sup>いた<sup>ぼく</sup>ぼくは、たとえ、悲<sup>かな</sup>し<sup>み</sup>や苦<sup>くる</sup>しみ<sup>に</sup>に、たたき  
の<sup>め</sup>め<sup>され</sup>されて<sup>も</sup>、正<sup>ただ</sup>しく<sup>い</sup>生<sup>い</sup>き<sup>よう</sup>よう<sup>と</sup>と<sup>する</sup>する<sup>もの</sup>もの<sup>には</sup>には、まだ<sup>うつく</sup>美<sup>しい</sup>しい<sup>思</sup>思<sup>い</sup>  
や<sup>り</sup>が<sup>あ</sup>あ<sup>る</sup>る<sup>の</sup>のを、真<sup>しん</sup>に<sup>う</sup>う<sup>れ</sup>れ<sup>しく</sup>しく、力<sup>ちから</sup>づ<sup>よく</sup>よく<sup>感</sup>感<sup>じ</sup>じ<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

な<sup>に</sup>を<sup>おも</sup>思<sup>う</sup>う<sup>か</sup>か、若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>は、ライ<sup>ター</sup>ター<sup>で</sup>で、た<sup>ば</sup>こ<sup>に</sup>に<sup>火</sup>火<sup>を</sup>を<sup>つ</sup>つ<sup>け</sup>け<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。  
た。青<sup>あお</sup>い<sup>け</sup>煙<sup>むり</sup>が、た<sup>ん</sup>た<sup>ん</sup>と<sup>して</sup>、空<sup>そら</sup>へ<sup>の</sup>の<sup>ぼ</sup>ぼ<sup>つ</sup>つ<sup>て</sup>て<sup>い</sup>い<sup>き</sup>き<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「いごもペン 3巻4号」

1949（昭和24）年4月

※表題は底本では、「道《みち》の上《うえ》で見《み》た話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「道の上で見たはなし」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 道の上で見た話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>